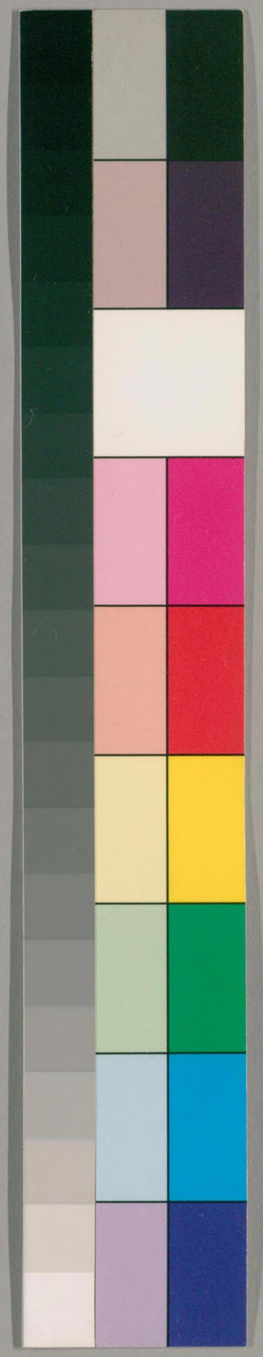
857
9
取扱注意
帙入



国立国会図書館　タイトル『玉櫛笥 7巻』 請求記号 857-9

ガラス使用

玉くしげ巻之二

○去依坊昌儀

丹波玉積臺の城主赤井後左衛門ちう。拙くかはゆく大武勇にすぐれたり。そこに年七八歳の比同国浦ぶ森あり変化の物ありて夜な入て八人をとらしけるぶたり其下ににも変化の物紙切とゞめたり。表あけてよく見ればたに竹おくおろきるとぞおる時要用の事ありて思ひしく京都よのぼり。京極回条のまちのもとに住蔵したるがう屋舗おりと儀く逗留しけるぞそのあたり近き人らのよしをきく笑山かゝり後左衛門が家来の作ふ謀るやう。此屋舗よいむかしより妖物ありて人おそれいりなしは夜ふさ

帝國圖書館
国立国会図書館　タイトル『玉櫛笥 7巻』 請求記号 857-9
ガラス使用

なりけれ出来りたるをとなし。あるひは打ころし
つゝ食ふ。このゆへりをもむ人絶てかくすさまじく
荒果たり。いそぎ主人にもかくり俊取へ帰りまへといふ。
仍大に拝をはぶし。強な歩つまかくと告ける。強な歩つ元来
相にはそれぬ蓄者なれば東にもをば。何系この帝都
整昌の地にさるはやし記相あらん。もしはりとも我ならず
一太刀なりといふぎんがなりけるを。目を蓄
なれば寝るに入前後ならば寝入なる。仍とし氣味あしを
いやくかなるはそれしき東に何ぞなすべからに帰りん。
不覚なりいざ皆く邪におくあるさんと思ひ合
ひとりは抜出口来何ぞしへ祇望の社にもしつ是はさ

直表してそのたりなる。強な歩つかくとしたらば唯きを
邪ならしが表半ばなりに何といふらば東の極にまに
人の足ゆとしたくやう直くをより叱くといひて起ば
ものあり。強な歩つ目何さるしきそれ宣傳らもの語りたる
化相なるべし。おしくよりたらば只邪とおにをん相何と
刀の柄に多とう字あるとなげまし。何者なれば旅人の帯
所に来り眠とはまるをはぞやといふ。其時あいの陰子と
さりとは字入来るものとこれば。大法卿女くろく頬骨
あき眼に知りあり。ちぐつにたるとうひ腹まれし長刀
ひれぞさき強な歩つと称めるを。我を是太佐衛昌俊とな
いらこの直輔の主なりめちやくらを出去直しといふ。

国立国会図書館　タイトル『玉櫛笥 7巻』 請求記号 857-9

ガラス使用

猪鹿の歩つさてハ去俗陀が逃霊とやめづらし紀剣の事をもたゞ
和かかその去俗が何ゆへよこの地の主なるぞ。去俗こゝろく
ゆゑらずやりしむしハお撰図二階堂にしてく鈴来堂の旗
かし。武勇知謀并八列に肩をかゝ帰る者なく。猿会殿
召出さしむ代友とせらる。そまたこの地にしてハ誓文原神也
あゞ見れ世の景敬ならば。猿鹿の歩くもあつぞかゝくと
打ちひ。ゆゑ生る所その悪り重き也し天罰蓮をめくらさば
その外忽誅伐をられ永くこの世にゆるされどそ神といはれ
この所にらぐまるとハ何事ぞ。おもしむゆゑが悪り伝記にあるし
さく万劫とふるとも隠すべからず。その猿会殿横原が繼会
と伝じ九郎お友と討んとしまふ。これ必堂にそむさん。隠

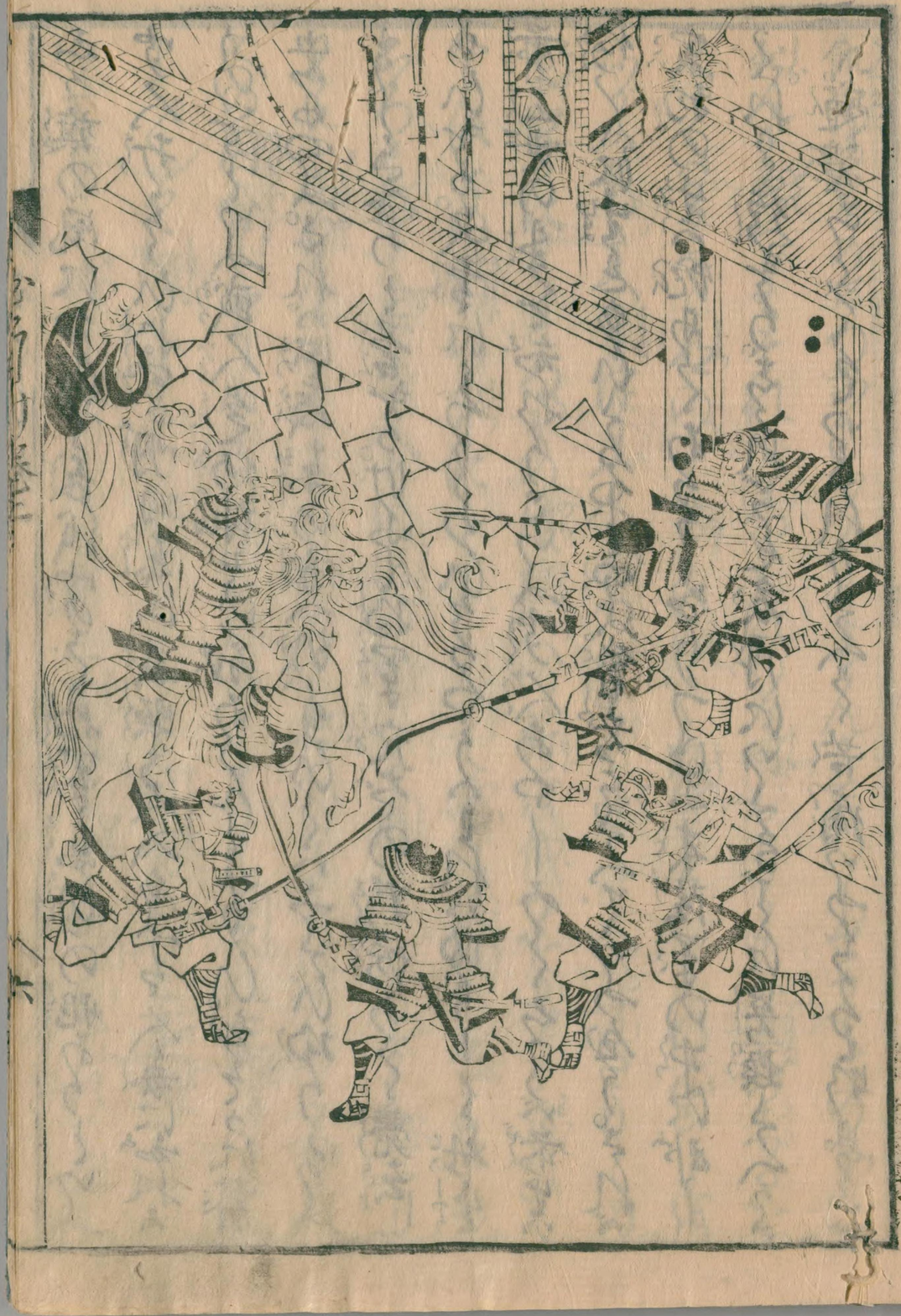
とそこなふくまくそなれば誰ありて討事らんといふものなり
ゆゑいづらの所領に出ありまかりくたやもく討事ぬんや
うけごふ。それ元ゆ不美のくまくてある所ハ同たる事のいく
さびも誅ちむべきにさらなく。同じ連枝の主君をかゝ
お友と討んとは。そもしきく君は討その逆罪誰か
かくまげらん。お官とあざむき追討仮にあらばといの
まり。ゆそろしき勢情とうさ。その表裏討をこゝへども
誓文の神罰たち所にむくいく大に仕そんじ敗小を。
命は惜し辱をもて。みぐるしき逃すり絶り探し
出さしむ。女子四人家の子良宗のこらば刑罰をられ。無名を
子義のもつにのらば。その神罰に徴て諸人偽誓ふまゝ

飛行をくらんとおもや。これ又何の為理ぞや。天子一人ちち和
誓文也の法なし。世の和歌ふるき者人和行賣買を用
にも偽とみぐらその價をいひたる。人の位ぎぐる時誓文を
吐鉛情を半ばいつまりなきよしをはくろふといへども。
んよも神飛あらんと思ふ弊帛をさげ供物をさ取へ
さまりはぐらん。何此の誓云雜たりとてまはくそ者
和歌を置ふ也。世の諺にて神は正直のかうべに宿ると
いふに。いつまりは人行をうふとは無思和神なるべし。しらしば
出くゆくべきものにあらばとて大刀打ふつゝ切るかゝる。
去作一云の面前にて及ばれ無んことを用を遊りをしづし
切りと為下よかの書に板出祇望に面来しをうれ

一人のうし至んりとなしとうく。まづ来あけざるに立ゆ
寝ゐに入るく後を来つをゆきり鉛し。いつにぞ来供物ゆい
あいすはやと問ふ。後を清門夏さめ汗ゐにありて大息
つぎ。夏に去作為昌俊をうり。行りしをびゆ多かりし
不へ泳く来り記せしありとて夢のありさ面かゝり。目此化
物ありといふは此者なるべし。しられども祇りまづ悪ひをう
ぞへさく黄伏ゝりぞよりのちはよも来らじ。ん面をく宿
留しといひそうがそのことがまたがまばおくろ来よりも何の
膝具もなくぞに人位つぐけを用とぜ

○贅者知三世

天文の中に津國天王寺の邊に文書の占ひよ面を治ふる



醫者ありきり。凡一切の和れ書を学ぶくその吉凶をいふり。
ぞうりもたがまはこれ三ぬ筑前当長度同名宗三入道に
聖人をふくこ合戦に及ぶ事あり。細川晴元和ふへに宗三
と異員し多勢をもつて後詰しきる。宗三晴元を近習
外様の大名小名を催し。其勢三千余騎江口の里にうち
上りあ沢の陣をすへきが。寛喜の勢害なればたやすく
歩べきやうなし。両よ長慶が奉弟十河一存わづかれ小勢にて
押よせきれば歩手の員なくんとれもいぬ者ならずきが。
かの醫者一存がるの足者ぬ事なく軍に勝負しとあへるが
。果して宗三敗北し雑兵の手にかかり討ちたる。又ね軍義
晴公東都を落まんとするよひれ月醫者屋敷の前を通り

志が旗の風にかびく音紙ゆのうく物軍事の兆ありといふ
雪人折まらひ物軍明日東山英照ち人入ますを人毎に知れる
事のとしいふ或人是何様その故あらんと申しい。知そうに瞽
者も同ふ。されば此夜東の方へ切りまひくいこうび物りまふ
まじきなりと言ひきるげにも物軍穴だの新坊おとく薨去し
ないきる。又雪にまづらいひそるやうはれは因うしく蚍生
前三世の事を知れりといふ。雪人あやしみてもうば前生は
何くに生をまひたるやと同ふ。瞽者こうへていふ風う。されば
穴初の生は蛇あらくあるしなりつゝに未陰軍の中に却し
うれて何きりしられども夜月にいたるごとに異換ふへうこ
く。遍體ことくそいされかゝへて苦痛いふらるまれ

飢渇くそのせつなさいうんともをんなうれしせめてこのまゝに
死んと思へどもそれもうなまじ。ある時ちらふ車の来るを
見てはまゝこと。のまん中に出て碾ところされんとす
称がふ。是さへ来はるふ人見つ事をく返ちへはまゝこのの
業むちにかくをぬ。その後樵人の薪何伐るを見て喜ひと
申しいその薪の中にまゝまりて遂に樵人の為よとあ
ちろされて果ぬ。又その後の生にて鹿となりぬ。よく肥ふと
ほとくこ燈をすゝらるとかあ。猶人のくあにうちころされ
人の肉食となりぬ。その肉一所づゝまりて貴に一所ごとに
ことくを腥もまゝつにしてゝがふくり鴉ありて烹調
いふるゝ減しれたりぬ。第三生にてちまとなりぬ。されば

鞭まうるはいさのゝ苦なりとせばたゞあやまつてもせの御
しづくそのおれ例を蹴とれば苦痛いふらりなし。まさ
ちきさ山あるひもおがると坂をひじとにはそのくるしさうな
しさ公骨は徹しきくたつぐたく覚えしなりそ食に人間
と生れたくも稚者世の業因のちりたく贅者となれるとちれ
ども前生の苦痛をもとれざるゆへに馬の室荷を負いな
なきあへぐを中のくはふびんにうなしきなり。又人の馬に
鞍ちくこゝに不山坂など通るを中のくはかなくずいさうなど
乗ちくゝ馬よりも抄給し歩りをしむるなりと説る世の人情へ
中のくあやしがり回来る者多なりきれば。贅者むつかし
くやせひそん或用いつくともなく落ちたその絶所をしてば

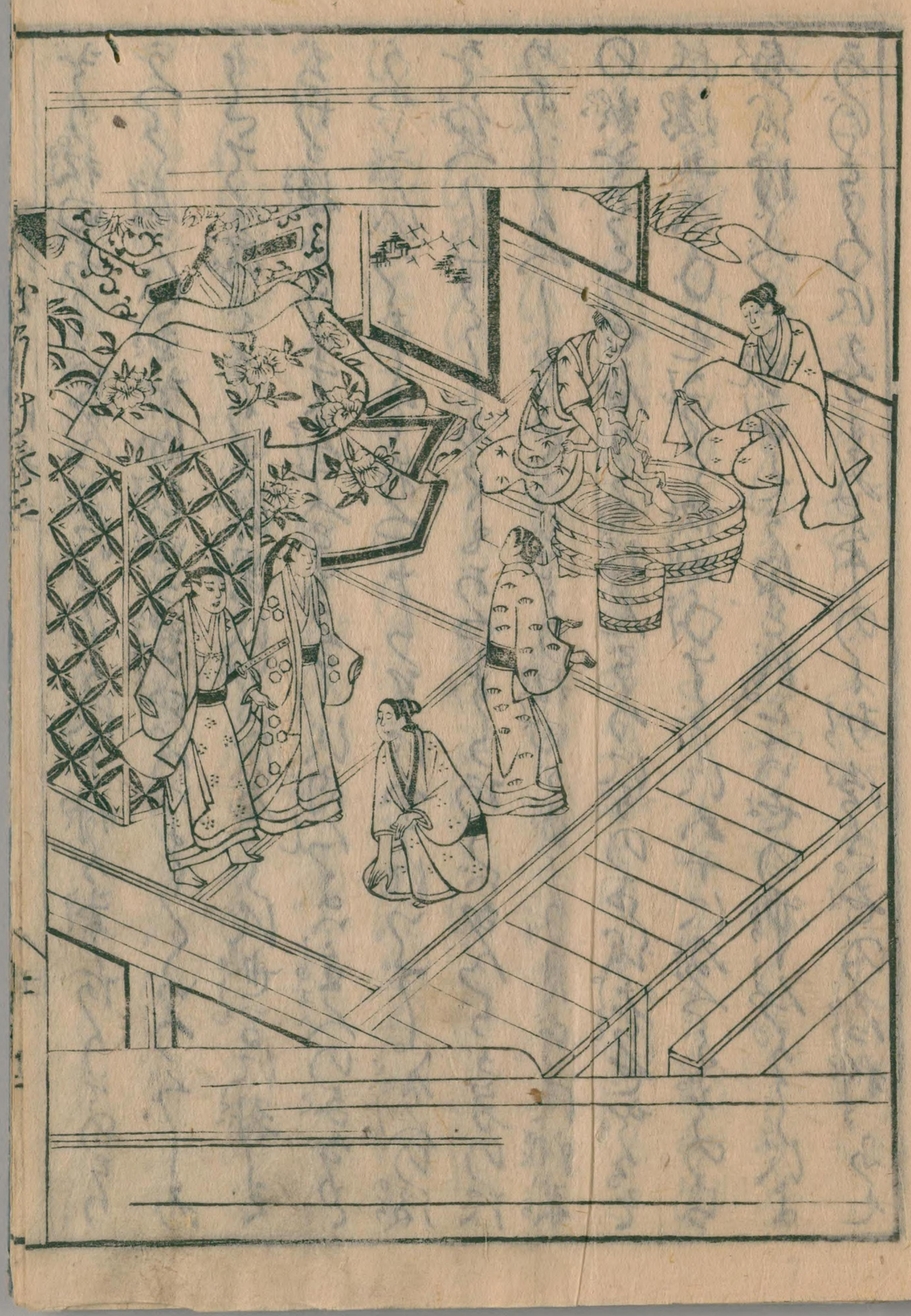
○親子の奇遇

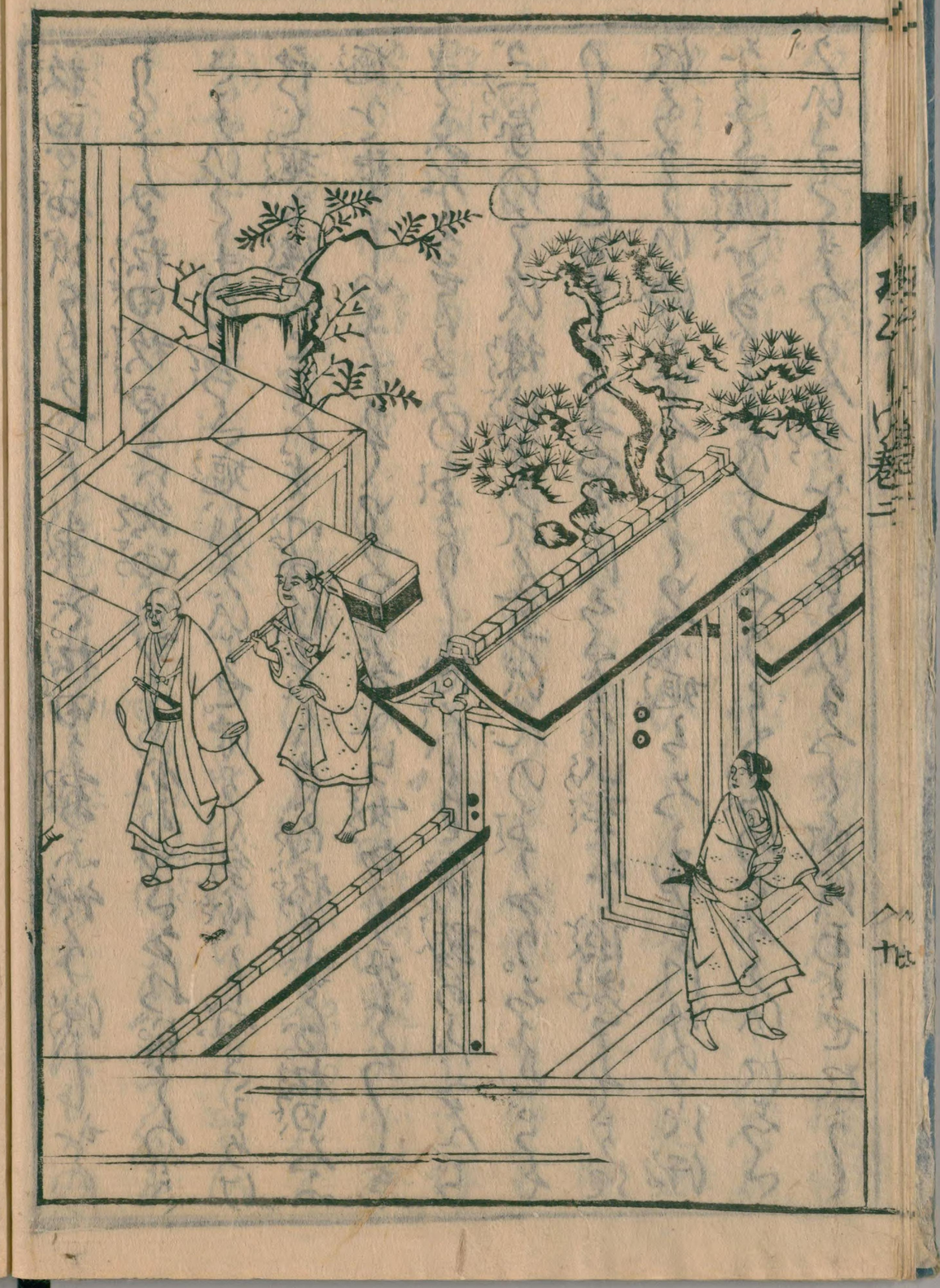
淮青和列戒重乃墉主戒重甲斐ち殿書代の家元に松田
板田とてあるありきり。あるに武原計器に連し無二
乃忠功とてぞましきれば。戒重の家数代事なく治りきり。
しかるに板田ゆきでに四十に餘きとも子のなさきをなげき
そ。一人の妻は親よりよびくだしてかくらひきる。その妻は
かざ母をなるなどよくおひしらひなさけ給しくかてなし
きれば内心をさやめて嬢妬しにくみそり。妻ある間嬢妬
しきる。板田を此りしをうくんの内にはひごろ此孫がひ
ちぬまで。人しきびよろこびきるに。その妻はまほく孫を
ましくかくこゆりて。ぴりにかして妻が雨産をはまるぞんと

ちかくて収生姫をこのこそかし妻が産ろ子男なれば何
ちぞ考へしまく。他人の女子はさづ孫かしめくこうとなりて女
子雨産と技術をべし。そう色なく仕すましなばその乗賞には
黄金十枚ほうすぎしと約束しきる。姫は何ぞ思案かれく。
かの黄金をもめづられて。ぴりにも紛やすくやりひたまへ。やげしめ
まにそうあひ侍らんとたしかにうけごひ侍りきる。打しも
此姫が姫もその此嬢妬し月ごろに成きる。姫よりさきひなり
こよろこび姫にも此事よくくいひきるせ。りしむまりて子
女なるはかの妻が子とさりかゆべしとたくみ侍ひごとに。一月
されどうく姫が姫は女を産。その後の月かの妻は男は産
きり。姫は思ひしくみし事なれば如ひぐ変さりかくし。

幼そうにまゐ姫がうまれたるまにかつて女子平産なりし按察
しまる。板田此うし家にいつまり孫なるとは思ひもよらぬ。大に
和尚をうしなひ。さるときもしまひしうひもなくたゞ忙然
としてたのしまず。妻もたゞになげきさうさ国よりなし。
このさびこそあれかさ〇くの河をいさ仏神をもいのるに
男子成りしめまへりしとて。こゝろもおとくしく行
会し僧神逆を取てひきかさ〇くの妻に男子平産
あらん事を訴誘しまる。板田もひごろを老智明辨なる
者なれども。かくげふく妻いつまりをれば。国をとぞとなひ
うたゞふんなるとまる。去程よかの姫松田が事へもつ孫に
り思ひまるがあるとに姫大に酒に酔て行もそれもうの

板田が子成とりかへし事を。松田が妻に語り渡しを
りとよると松田板田とは親切にかくて有あいだなれば。ぜひとうさ
さまひくまゐ急ぎ姫成よびよせ。はよく会伐し国をまゐけ
神ぞ。姫も強んとすれば。けだしぐ白状しまゐ。松田大に
姫をおどしいましめていつまやう。なんぢ女なるゆそうしき
してみをなせり。このまゐりし他人よると孫顕あらばなんぢ
が一身のうへに誅伐をうれんふびんの事なり。そうもどうも
りしそもうしがいつまやうにそうだゞ此事を隠密してよれ
にそうしひ泣さすべしといへ。姫そうよゆそれゆのに汗
をうさ涙とながしたゞいうやうとも君のそうひにして
がひしてまつらん命をたまけまへとまゐ成あらせれがし





国立国会図書館　タイトル『玉櫛笥 7巻』 請求記号 857-9

ガラス使用

ぎり。松田さうばなんらにたしかに中付る事なりそのもり
うへらくさらひ並きな松田が男子氏がよくくいろくしみ
そこでて家ぞうりも陳男にいたに置うに世間に對して
もわが孫子として書へるも。なんらに内人よい主人の子なりと
うやまひつたまてあやまらなりやうにいたし。私人の後
を行へし。すこしふくもあやまらなりばなんらが男のた
めあしうるべしとらく。こはより松田がおもり月ごとに御来
の數をたてゞせ居りたく。孫んごろにかの子氏書せなる。そ
れ後五六年もすぎて松田氏すぐに五十になべしもそのち
氏はぼづき男子もうはしに。ヒハ世の中人ようによ
ろづらうにかよぬ事のこと折給ふ。世の名利ふん

をさうり。知ることを後世氏孫がふんお来ぼく斗藏沙に
男子もなくがやと書ひ立らく。わが家ぬも内くせしと
きれば。家もおよかなしとなげきていふやう。おもそお家沙
のよなりたく乞食流浪の男ふなるは皆その男ふなにして
世にあるるひなく。人にそそくきさうかまたわくて母親氏
うしなひあるひはいとゆしき家やみにおれてなげきに因よ
ひとくお家をうたぐひ。そのためしすくかうに。ヒ君も何者
なげきうまへありたくかかる思ひ立しまふらん。男子のみに
もこれ皆お世宿業のさだまれるなりとなくなりたく
いさめきれば。わが家さへそもうと因しくらうばれなく。そ
きるある同松田松田が館にひきれば松田お追つくまづ奥に

請じいれ酒肴とりいでしことさらにりてかしをり酒宴なり
ぞに板田すこし歌久かりくなるぞとなりしをり。松田あや
しきそこはそも何なりくいなげきかやとなる板田しづらくは
はらく涙をおしとゞめ。さきはられちかに閑よりお家せんと云ふ
そのゆへは秋をり。ゆゑ十ふなつり。ぱらく人百五十ゆの
蓋裏苔ふをかりしよその長ぶ半鬘が半ぶ更ふ羨
幻となりくらぐ間ぐに浮世をさぐく假ふあらばや。これ
老く家はつぐづき男子なりし。そよりせよくづらひ名利を
半らし業へとさまはしも作がるあにかそん。しりしそやくせ
秋いらひ分を源んとかりつゝ。たゞその酒宴よそ此世のか
ぎりなるんと不見の涙をながしつと語る。松田打笑いとく

何事をなげきかゆんとんりとなくかりしに君男子の
なれ事はかりしをかゆらや。君ふはたしかふ男子物語
つよぞかくのさまふそころえねといふ。板田座奥より
いふとかりし戯も同よりも半なりとて。すこし恍る
ていなり。松田いやく戯れよあらば親の分にしてわが子
ある秋はまれかつかが笑しきなりとて。松田打て
笑ひをり。板田いよくしたらいふまが分にあげうぬ
とくへのなげきを奥どうも何事ぞやとて。すぐに座
席秋起んやに。松田しからば志づらく物なへとて姫が方
よりまうの男子秋よびとるを君せられば何にも親子なる
しかしにくその容顔けいひまがふ不なくまが分によく

濃ひねさせば此事のことにかぎらず。其も様も極る女なれ
ならひ和孫さえ悔くうらいりてその夫代せらるぞ。いさ
ういちらぐらしてもあれ彼を我と換じ。果はいせ後とたら
家の代滅せものかかし。深くおそるべきにあれ
ぞや

○和尚道欲

お横岡三浦芸次郎義宗は三浦大介義明の後胤陸
奥守に寸入れの子なり。男の長七尺四寸八十四人が力
あり。鬚黒く眼大にしてく子足の猛く健なるさと虎
豹なん場に似たり。永正○中上杉修理大夫朝興の幕
下に属せらく小桑原宗と合戦せること数度に及びり。

しかれども欲大軍なれば三浦安からまけく
お別軍の場に楯籠る。早雲押寄せ○〻夷戦と
いへども深くやせく落ざるとなり。同じ永正十五○七月十一日
城中粮尽二十余騎命をすてて討て出絶日せん戦い
をしくも討死し三浦は寸も服さ切く失ぬ。芸次は生
○女一歳にはなれとも討てさたぐ思ふさ夏軍しく心
よく討死をんと一丈二尺の櫻の柱八角にをづりたるを
抑ふつて東西まうけて大勢にはたり何ひあるを
幸にはしるしくと薙倒せ。同じとに大強力の勇武なる
を究竟とせしさきなれば前を向べき屋うもなし。弓矢
楯鑓のさらひなくなりしよりも折ひしぞ落花微雲と

国立国会図書館　タイトル『玉櫛笥 7巻』 請求記号 857-9

ガラス使用

あらばらくかの獄の北おまえ
うつくしも兼ても志らぬ事に称ふり
浮世のひとは何あきがのくそ
ゆうに一その君を称しまへだかの首たちよりも服何
四ちく浅うせきる。人皆初当の変鳴の君おぐく連しまつる
ことを感じきる。されバかゝる大事強勢まんためし異国に
ゝは呉の伍子胥蜀の関羽この二人死後よその学何獄
のよ無されども朽ざるときる。本朝ふしゝは相馬将門と此荒
次郎なるべし皆死後一気の猛氣安ぜばしゝ此奇変
とあらはせり。此荒次郎一家滅亡して自害をしハ永正
十六年七月十一日なり。その然気無じきるかや。その後

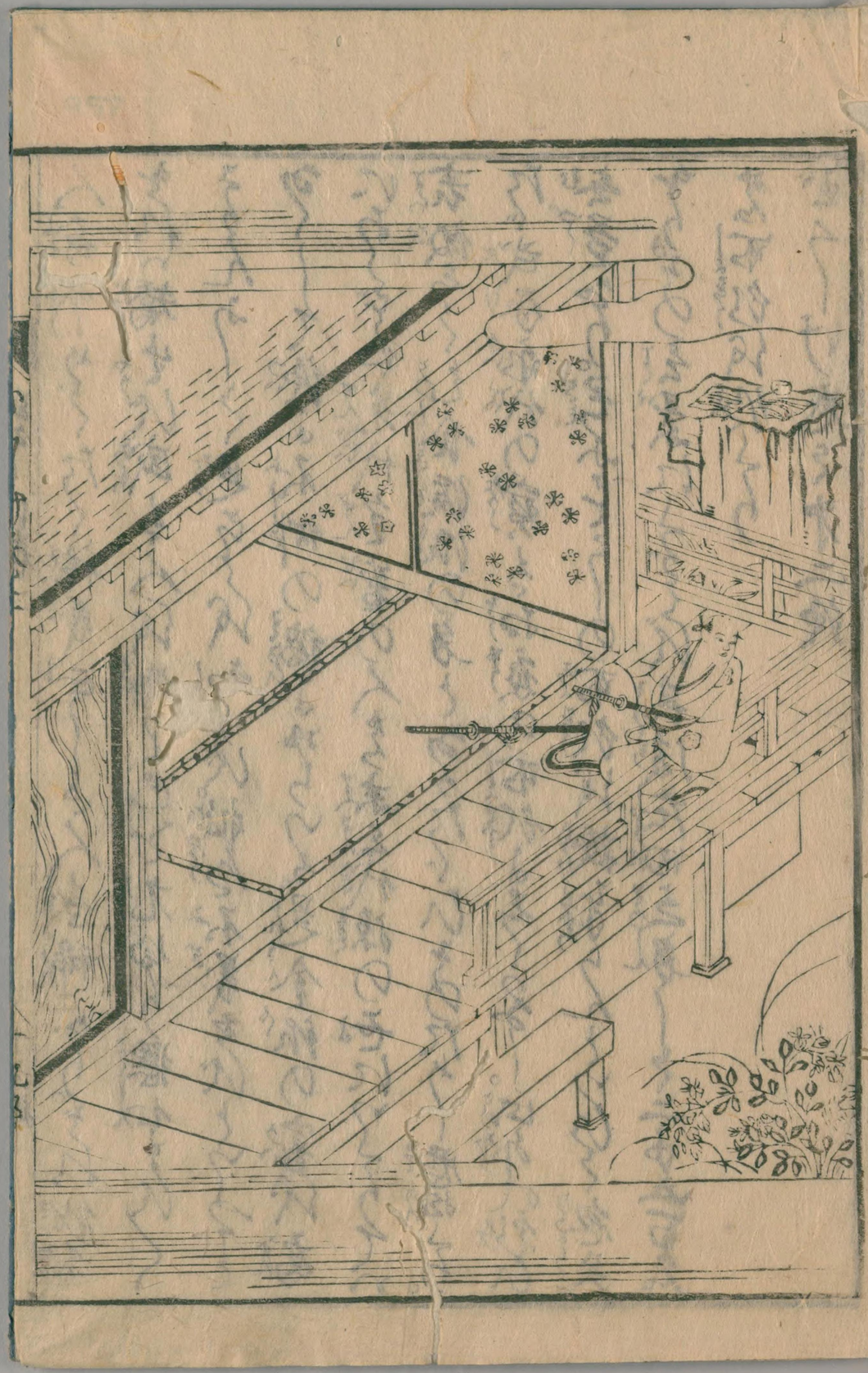
小条里の滅亡をしも七月十一日なりし。このゆへよその
代おぐくも年々七月十一日は関声矢さけびの音なしこそ
惜しき事も絶ばといふ

○貴狐明神

夏七の初年紀民弱山浅野家は仰ま店田助右衛門といふ
者あり。ある同奥の君の様子によるとそひしげに庭おけ
草花を詠め居きる。同よいづくともなく狐一足ちしかも出
らるがうちに人よ化粧何見跳さく袴をなに。店田先を
見ちく汝狐かしく眼前なんとなる不思議ありかり。
そ何ゆへよそに来りて弱みぞと申ふ狐こゝへ来れ
の慈悲深さ何知り粧さてまつる尊さ事なりく来

まゐり。そのゆえは君の一家の中にぬきて狐は御はり殺れ
悪人あり。家一族子孫たちまちまぐたちに滅されたる老
狐の殺さいりだるまでは君は孫云なくては山まじさ
人なり。何りは御芳志より白後歸り年ざるやうに教
刻は何くまへまへし。此事個いんにおいてを何食うれ
匹禮なりとも願に用りせたくまつらんとて源を流
し侍せる。庄田中のくに宮屋とき事なり。制し山さく
頃さくんかさゆらく来るべしと契約を狐たちによりこび
云事しく失せば。そのくち庄田の悪人を用孫さ
教刻しその歸を家が来へとり並ぬ狐よろこびまゐん
に伝えあらりは家業の大事は何たのこなりしに連に

停止せしめまゐしとも難きはめぐこいづもの日ゟ忘れん
君何事にもくも殺あらば力れりけり報じ事らんといふ
庄田何かといふもまづらつし。たゞ家庭にこのうぞうを金
銀は何あらんよこの事にこのこなしといふ。狐中のくに
うちく知ひあくはゆろうれり孫がひなり。来るりと稲荷
大明神の使者にしてすぐに貴狐明神と神位を陽
色りしうはども富貴のかれしさは餅に除くは命を失
ぬこと何しらば人は萬物の長にして神仏と同性なり。
智恵明かに利害は何ともまゐ。いりんぞ他の寶は捨てく
知らんに金銀を貪りしかや。法なくしてく俄に富るを吾
事にあらばつくしその重衰を祝ぞうに貨財多くさ



国立国会図書館　タイトル『玉櫛笥 7巻』 請求記号 857-9

ガラス使用

857

人壽命めぐたく祐義正しき人甚稀なり。それ鉄奴
きれば矯生ぐ或は人は梅は己を尤なり懇心まにく
さうんかしく足ぬ事は無ぐ。此事不義をぐといふこと
なくして終に不例の禍にゆらいる。是金銀の害は為
にあらざや。先代皇室の人は末三代孫の世にいたりてい
衰微しく元食流浪の身となるたぐひそのためや歴然たる。
たゞ武家永代の寶はお寶の所領にしてなし。此外は朝ひ
無量なり。君にもとこしの所領は授事らんといひて忽失
きり。その言葉にしたがえば其後庄田立身しきて二千五百石
は所領は頃たり
玉うしげ巻之才二終

国立国会図書館　　タイトル『玉櫛笥 7巻』 請求記号 857-9

ガラス使用